

長寿社会を迎えてのインプラント治療を考える

— 多数歯欠損のさまざまな補綴選択と要介護を見据えた インプラント治療 —

講師：田中譲治会長

日時：平成27年1月25日（日）

場所：大阪梅田・ブリーゼプラザ 805会議室



加納 淳一（兵庫県）

今回は田中会長に「長寿社会を迎えてのインプラント治療を考える」という演題で講演を頂きました。

田中会長は長年のインプラント治療から得られた経験を基に様々症例や文献等から、無歯顎や多数歯欠損に対してのインプラントアプローチでは少数歯欠損に比べ骨量や骨質の診査のみならず顎堤の吸収量をも踏まえることが大切で、歯冠だけでなく顎堤の回復も考慮して3タイプに分類し補綴設計をすることが重要であるということを経験を通して講演を頂きました。

なかでも臨床上外科的侵襲や経済面から躊躇される方が多い多数歯欠損において、少数のインプラントで高い治療効果があり長寿社会のニーズに即した磁性アタッチメントを用いたインプラントオーバーデンチャーについて症例を中心に講演を頂きました。

講演中も参加者を交えたディスカッションとなり盛り上がりを見せた研修会となり有意義な一日を送ることができました。

今日の研修会で学んだ事を少しでも日々の臨床に繋げて頑張りたいと思います。ありがとうございました。



厚生労働省研究班

65歳以上の4425人対象、4年間で認知症を発症した割合が20本以上 ⇒ 2.9%
 歯がほとんどなく、入れ歯も使用しない 11.5%

調査 期間 場所 参加者 研究員

歯のない人 認知症1.9倍

65歳以上で自分の歯がほとんどなく、入れ歯を使っていない人は、歯が20本以上残っている人（比較）に比べて、介護が必要になる可能性が1.9倍高くなること、厚生労働省研究班主任研究員、池田幸彦、日本福祉大教授の調査でわかった。

＊65歳以上 厚労省調査
 認知症の65歳以上の4425人を対象に2003年から4年間、アンケートを毎年一回、介護が必要になる認知症の発症と割合は、歯が20本以上残っている人は2.9%、入れ歯を使っている人は7.3%、歯がほとんどなく、入れ歯も使わない人は11.5%以上だった。

年齢の進みや持病の影響を考慮して計算した結果、自分の歯がほとんどなく、入れ歯を使っていない人が認知症になるリスクは、歯が20本以上残っている人に比べて、1.9倍高かった。食べ物（あまりかめない）、食べた人の割合も「同じ」もなかった。食べた人より1.5倍高かった。

調査に携わった山本健生、神川健太郎大教授は「食べ物や水分を十分取れないと脳の認知能力が低下しやすくなる」と考え、早めに対処や歯周病の治療をするのが認知症の予防につながると述べている。

